



毛利氏庭園・
毛利博物館



玄関(車寄)



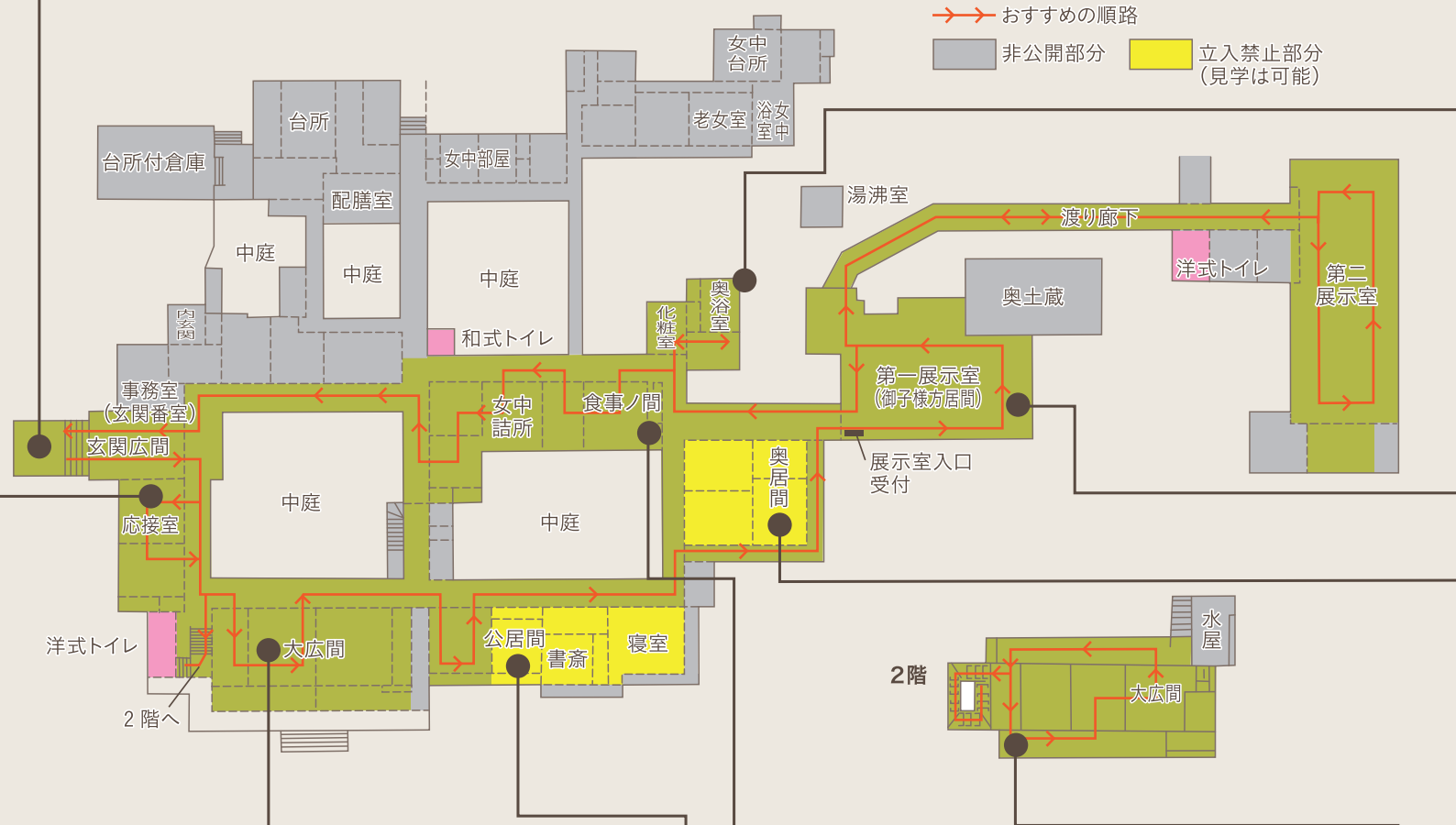
貴族の邸宅に由来する車寄は権威の象徴とされる。当邸のそれは、大きく張り出した唐破風の屋根が公爵家本邸の威厳を示す。

応接室

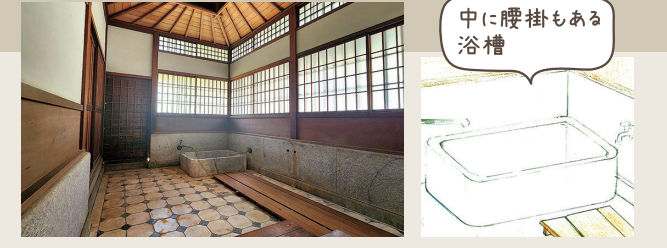


和風建築の毛利邸にあって唯一洋間として作られている。

旧毛利家本邸本館内MAP



奥浴室・化粧室



毛利家当主及び夫人の浴室であり、浴槽は大理石の豪華なものである。給湯施設が当時から完備し、蛇口をひねると湯が出てくる便利さは公爵毛利家の本邸ならではのところ。

展示室



第一展示室:元の子供部屋を改造して展示室としたもの。第二展示室:国宝の特別展示や企画展示のため増築。

奥居間



おもだか 沢瀉を取り込んだ襖や欄間の意匠が、女性の部屋らしく華やか。縁の向こうでは、貞明皇后ゆかりの紅梅が彩りを添える。

公爵毛利家の本邸

公爵毛利家の本邸として、構内には当主一家が居住する本館だけではなく、毛利家の始祖天穂日命以下の歴代当主を祀った祖霊社、毛利元就以下の画像を配した画像堂など宗教的な空間も設けられている。また邸内には神代杉や神代樺などの伝統的な良材だけでなく、鉄筋コンクリートやタンなど当時最新鋭の建材もふんだんに用いられていた。邸内の電力はすべて自家発電でまかなわれ主な部屋はインターホンで結ばれるなど、伝統的な和風建築と最新技術とを融合させた建築として目を見張るものがあった。

また完成直後の大正5年(1916)には大正天皇、同11年(1922)には貞明皇后、昭和22年(1947)には全国巡幸中の昭和天皇、同31年(1956)には昭和天皇・香淳皇后も宿泊し、公爵毛利家の本邸としての面目を施している。

毛利博物館とは

毛利博物館は、近代には華族の最高位である公爵の地位にあった旧萩(長州)藩主毛利氏の本邸を博物館として公開したものである。また所蔵している文化財は、すべて旧公爵毛利家に伝来したものであり、総数約20,000点に及ぶ。

客室(大広間)



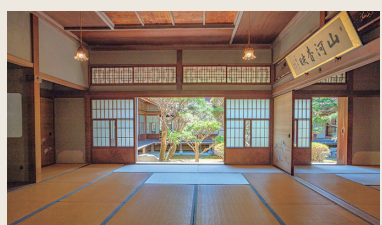
江戸時代の大書院形式を踏襲して天井には格天井が用いられ、一の間は折上格天井となっている。

公居間・書斎



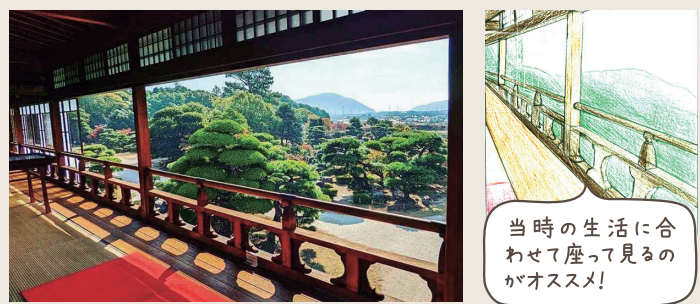
家主である公爵毛利元昭の居住空間。書斎の床柱は桑の玉杵が用いられている。付書院の火灯窓風の窓枠は主人の間ならではの凝った意匠。

食事ノ間



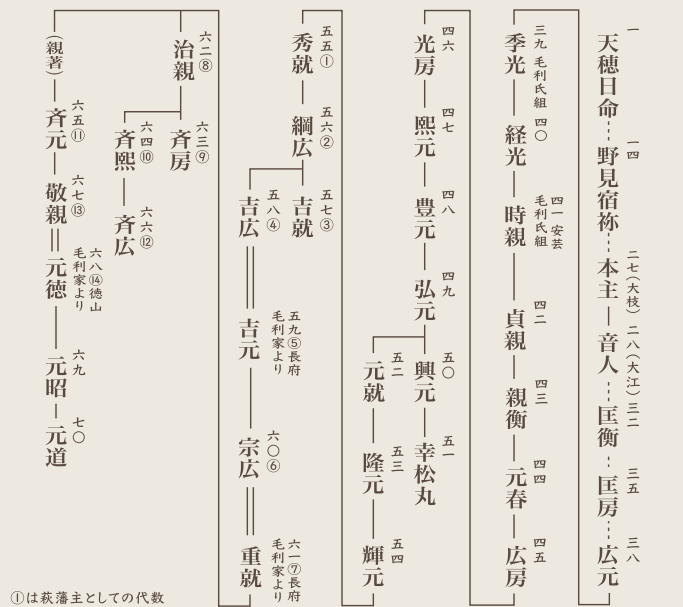
家主たちが食事を取る部屋。天井は春日杉の格天井に、周囲に神代杉の巨大な鏡板を用いた豪華なもの。襖は、芭蕉布に扇面絵が描かれた軽やかな意匠。

二階からの展望



二階から眺めると、南側に広がる奥庭と瀬戸内のしまなみが絶景。より和風に仕上げられたシャンデリアも見どころ。

毛利家略系図



①は萩藩主としての代数

毛利氏庭園内MAP



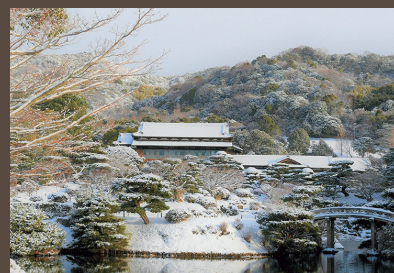
① 灯笼ごしの展望

奥庭は池泉回遊式庭園中。順路に従い散策していると、庭で一番の撮影スポット、鉄筋コンクリート製の大灯籠の前に到着する。



② ひょうたん池から本邸を望む

中雀門から奥庭に入ると南側に満々たる水をたたえたひょうたん池があり、四季折々の表情をした本邸を望むことができる。



③ 雪景色の内庭

ひょうたん池からは四季折々の旧毛利家本邸と奥庭の木や花が織り成す景色が楽しめる。雪景色も息をのむ美しさである。



④ 前庭

旧毛利家本邸正面の入口の車寄の前に巨大な灯笼と大きく育ったヤマモモ、サツキが配置され、前庭を海に例えるならば、海に浮かぶ島を連想させる。



⑤ 芝生広場の桜

中雀門から奥庭に入ると右手奥に広い芝生広場が見えてくる。春は桜の花の下で弁当を広げながら藤やサツキ、ツツジなどの花も楽しむことができる。

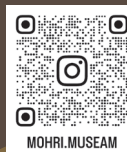


⑥ 本門

国指定名勝「毛利氏庭園」重要文化財「旧毛利家本邸」「毛利博物館」への入口であり、かつては、両脇の小さな扉のみしか開いていなかったようである。



LINE



INSTAGRAM

公益財団法人毛利報公会

〒747-0023 山口県防府市多々良一丁目15-1 TEL 0835-22-0001 MAIL mouri-m@c-able.ne.jp

パンフレット作成協力: 山口県立防府商工高等学校 3年毛利博物館班